

宗教と「企業文化」

サッチャー時代（一九七九年～九〇年）の英國の体験¹

リチャード・H・ロバーツ

藤田尚則 訳

はじめに

「経済学は手段である。その目的は精神の変革にある²。」

マーガレット・サッチャー（Margaret Thatcher）のこの言葉は、（一連の社会経済政策措置として理解される）サッチャリズムと、いわゆる「企业文化」（構造転換した社会の理念的な将来の状態の縮図）との関係を、独特の率直な言い方で示したものである。サッチャー政権時代（一九七九年～九〇年）、社会経済的な「英國の実験³」は、「新生英國」⁴を創造する目的で着手された。一九七九年五月



の選挙で保守党が勝利をおさめた後に導入された、明らかに漸次的な一連の措置は、個人の「精神」の転換を含んだ、より大胆なイデオロギー的、文化的野望と要求を具体化した首尾一貫した計画の形態⁵をとるようになつた。実際、サッチャーが主宰した行政の最終目標は、國家の復興、「強力かつ自由な英國」の再建にほかならぬものとなつていつたのである。したがつて、本稿で論ずる時代は、多くの点で特異な時代であつたと言わざるをえない。

サッチャー時代と「企业文化」を、境界が曖昧な宗教、

経済および政治といった視点からあえて考察することには、不都合にみえるかもしれない。しかし、しだいに明らかになるであろうが、実際はその逆なのである。⁽⁷⁾ 一九七九年から九〇年にかけて、「宗教」は予想外に人目を引くようになった。というのも、一方ではサッチャリズムの社会経済的、イデオロギー的指導力が増大する中で、他方では「企业文化」や労働党の相対的弱さと混乱の中、宗教が、二者択一的な公的論議にとっての源泉の一つとなつていったからである。英国における宗教の復興は、確定しにくいほど大きな転換的効果をもつたものとして理解されるだろう。それは、ある意味で、革命前の元ドイツ民主主義共和国や東欧諸国で宗教団体が果たした役割やその社会的立場に類似している。それらは、一九八九年から九〇年にかけての出来事の先鞭をつけたのである。「宗教的 (religious)」と「宗教 (religion)」という用語を用いる場合には、慎重に区別しなければならない。

本稿では、「宗教」という用語を二つのレベルでとらえる。第一に、サッチャーポーク時代、全体としては信仰在しているのである。

「サッチャリズム」および「企业文化」という基本的概念の定義や文脈の分析を行う前に、サッチャリズムに過度に見られる非実際性やレトリックについて簡単に述べよう。

一、「資本主義の勝利」——サッチャリズムにおける過度なレトリックと精神性

サッチャーポークの終わり頃、指導的な敵対者たちは、勝利主義的レトリックで表された遠大で国家的な、また世界史的ですらある望みを抱き始めた。そして、そのレトリックは、一九八九年末の革命的出来事の直後に、最も耳ざわりなものとなつたのである。皮肉にも、これはまた、国家的な転換期に生じた。その時期は、それまでの十年間に英國で行われた遠大な社会的、経済的および政治的措置の意図的な、また非意図的な諸結果が、突然、それらを鼓舞し駆り立ててきた幻影の信頼性を破壊し始めた時期である。

一九九〇年一月二十七日、IOD総裁ピーター・モー

人口が減つたにもかかわらず、政治生活や公的論争に宗教的因素がふたたび入り込んだことが認められる。この点に関して、デービッド・マーティン (David Martin) は、「英国において、一九八九年初頭にマスコミに接した人はだれでも、一般の人々の宗教への信仰や活動が極めて減つてきているのとは対照的に、宗教に関するニュースが極めて増加していることに衝撃を受けたであろう」と述べている。第二に、サッチャリズムの時代と企业文化の特徴には、宗教的および神学的概念とカテゴリーを現実的意味と比喩的意味において用いる分析を促すような特徴がある。われわれは、これらを、サッチャリズムと企业文化の疑似宗教的特徴と呼んでいる。第三に、理念と社会現象に特有な核心が存在することが論議されるべきであるが、それは「企業宗教 (enterprise religion)」そのものと呼ばれるであろう。(ニューエイジ) の様相を呈している) こうした宗教意識は、企业文化の前縁で働く個人および集団の重なりあつたネットワークによって共有されるが、なお主として英國の主要なキリスト教団やその他の宗教団体の制度化された機構の外側に存

ガン卿 (Sir Peter Morgan) は、IODの年次例会で演説し、次のように主張した。すなわち、「本大会が計画されて以来、東欧では革命が起きてきた。市場経済は勝利したのだ」と。ピーター卿は、市場経済と「企业文化」についての普遍的要求を釈明することなく力説し、まだそれらに反対しようとすると人々を攻撃したのである。といふのは、彼は、「企业文化とは、すべての個人が、世界は彼または彼女に生活の義務を負つてはいないと理解している文化である。そうであるからこそ、われわれは共に活動し、すべての人は、英國のPLCの成功のために働いているのである」と、述べている。

モーガン卿にしたがえば、企业文化とは、「旗艦」(成功した会社)、「英雄」(先導する指揮官) および「誇り」(生産物) をもつたものである。したがって、全国民は、非戦闘員が存在しないグローバルな経済戦争に閉じ込められていると考えられたのである。しかしながら、全国民を「経済戦士」として教育するには、三つの障害があつた。すなわち、「支配層の意向」(富の創出を軽蔑し、富の分配を称賛した主教たちによって集約的に示される)、「中産

階級のサラリーマン」（教室、演壇およびメディアで「リベラル・エスタブリッシュメント」を繰り返す、教育を受けてはいるが遊歴する人々）、および「浮浪労働者層」（何ももたず、また、寄生的依存以外には社会において利害関係をもたない残り四〇%の人々）がそれである。実際、非常に忌み嫌われた「依存文化」の静態的な消極性は、「企業」の動的な徳に対する、鏡の像のよくなものであった。

モーガン卿の理論体系は、貧困な社会学であつたにもかかわらず、新たな英雄的な指導階級（classe dirigeante）の陰謀的懷疑をうまく説明している。その指導階級は、自らが社会のあらゆる階級に与えられる利益の無力と無感動に直面していると認めていた。したがって、ピーター卿は、説得しようしたのではなく、主張したのである。彼は、累積的議論や帰納法を通して訴えたのではない。流行遅れの依存という信用されない過去にとって代わる、新たな力強い決まり文句を提議したのである。残されたことは、社会全体に——実際には世界に——新秩序を構築するために、最後の行動を起こすことであった。

モーガン卿の演説は、今や誇張し過ぎた言行⁽¹¹⁾、皮肉に満ちた傲慢な宣言と思われる。しかし、そうしたスタイルはその時代を十分表現しているものである。

ジョナサン・ラバン（Jonathan Raban）は、スコットランド教会総会でのサッチャーの演説は、モーガン卿の話方と変わらぬものだと指摘している。すなわち、「妨げるもののない行動と妨げるもののない言葉に言い換えられた、力あふれる言い回し。説得力ある論議に伴う計略のすべてが失われているために、議歩のない言い回し」と批評しているのである。その後、モーガン卿の演説が政府部内での驚くべき急速な信用失墜をもたらしたことを得ていたにもかかわらず⁽¹²⁾、一九九〇年十一月のサッチャーの辞任へと動いたのである。 Dennis Kavanagh（Dennis Kavanagh）は「政治家はレトリックによって生きている」と述べているが、後から考えると、政治家はレトリックによって死ぬとも言えるだろう。

新首相ジョン・マージャー（John Major）とカントベリー大主教ジョージ・キャリー（George Carey）は、独力で地位を確保してきた貧しい身分の出身者であるため、

英國の政策は次第に派閥主義になつていった。こうした総括は、まだしばらくは評価されるべきではないサッチャー政権の長期にわたる社会的成果について誤解を与えるかもしれない。サッチャリズムのレトリックは、今やサッチャーが権力の座から退いたことによつて放棄されてきている。しかし、多くの政策は、経営上および行政上の手段によつて存続しているのである。現在、こうした傾向は、イデオロギー的には、「人権」を消費者の権利に言い換えていたいわゆる市民憲章（Citizen's Charter）に具現化されているようだ。説得力に欠ける（しかしそう複雑な）「メジャリズム（Majorism）」を政治的に正当化することによつて補強されている。

サッチャリズムの公的なレトリックと企业文化が失墜したことは、伝統的階級に与えられていた社会的権力を取り除くことになった。事実、変革をめぐる論議は、現在あまりなされていない。主要な宗教団体は、市場経済（すなわち資本主義）や新たな領域への継続的拡大についての理論および社会的現実に対しても、発展的な態度をとつていないのである。そのため、政治への宗教の関わりは、それ

この重大局面は、サッチャー政権下で一時的に影をひそめていた長期にわたる経済的衰退を、ふたたび表面化させることになつた。⁽¹³⁾ こうした状況の下で、サッチャーイズムと企业文化の、普遍的かつ全体主義的な大望は失われたかに思われた。企业文化が形成されなかつた結果、

に応じて減退してきているのである。

二、いくつかの定義——「サッチャリズム」と 「企業文化」

サッチャリズムと企业文化は、親密に関連しているけれども、同一のものではない。本稿では、サッチャリズムは企业文化という理念的、将来的な社会文化的目標についての経済的、公的政策の基礎として考えられる。

けれども、両者は共に、社会の変容過程で、相互に関連する両側面として存在したのである。サッチャリズムは、自由市場の拡大のために立案された総合的計画であり、全消費者の「自由」と「選択」を高め、「依存の文化」を払拭し、資本主義的な「自立した個人」の企業家活動を解放するためのものであった。それゆえ、サッチャリズムは、企业文化の不可欠な条件として、また、「精神」の内面的変革を伴う、外面的で目に見える計画として理解されるのである。企业文化は、いつそう抽象的で「全面的な」レベルで、すべての大衆の自己認識、態度および行為を永続的に変化させようとした。すなわち、それが

よって、サッチャリズムは有効に機能するのである。⁽¹⁹⁾

より広く考察した場合、サッチャリズムは、さまざまな政治的立場から十分に検証されてきた独自の歴史と発展をもつていて⁽²⁰⁾。その源泉は、英国の保守主義内の複雑な転換過程であり、そこでは、サッチャリズムは、新右翼の思想の強力な影響の支配下に入ったのであった。サッチャリズムの成立は、まだ十分に検証されてはいないが、注目すべき伝達過程に関わっていた。それによつて、新右翼の私立の「シンクタンク」から引き出された一連の社会政策が、次第に公務員による立法案となつた。それらの法案は、議会の（儀礼的罵詈雑言も同然の）厳しい評価基準の下で検討され、その後に法律として制定されたのである。

首尾一貫した政治的信条として理解されるサッチャリズムは、以下のように要約されるだろう。

①永続的な善を行うための政府の制限的機能、また、損害を及ぼすための政府の強大な機能、②個人の責任への重大な圧迫と、正義と不正の存在、③適切なる国土の防衛を確実ならしめ、国際法および秩序を保持するとい

は、国家的および国際的規模で考えられる社会文化的な巧みな計画を含んでいたのである。「企业文化」 자체が、その成立に必要な条件であるサッチャー的な概念から分離できるものかであるかどうかという問題は、引き続き重要性をもつていている。

a サッチャリズムの構成要素

「サッチャリズム」の定義は、明確ではない。というのは、カーバナが論じるよう、それは、マーガレット・サッチャーの個人的信念や目標も指すし、一連の社会政策も指すからであり、同様に、もともと英國で正当化された政策を国際的に適用したものも指すからである。近年の英國政治においては前例のないほど、一個人の個人的信念が政府やその政策を支配した。サッチャー自身、そのことを非常に簡潔に述べている。すなわち、「私は、彼ら（彼女の見解を適用する外国人）に、サッチャリズムとは私よりずっと古いものであると言いたい。それは、基本的な常識、政府権力の制約に基づいており、政府の活動の成果を人々に与えるものである。そうすることに

う一定の「基本的任務」を履行することが可能な強力な国家の存在⁽²³⁾、④個人の問題は、中央であろうと地方であろうと、政府に訴えるよりも家族関係の中で（もし可能とあらば隣人への訴えによって）自ら解決すること、⑤対応する経済成長の伴わない公的支出の増大、増税、そしてそれによつて生ずる消費力に現れる「選択」の現象を認める、厳しい財政規律、⑥市場は、経済成長および自由選択を促進し、個人の自由を守る最善の手段であると認めること、⑦訴える手段が借用またはインフレーションに対して設けられていない限り、一方のサービスに対するより大きな支出は、通例地方のサービスへのより少ない支出を意味するとの確信、⑧弱者、病人および失業者のために政府が介入することは、減速する社会の変化する世界の中での適合能力の点からみると有害であるといふ信念⁽²⁴⁾、⑨引き続き拡大する産業および公益事業の「私有化」、事実上あらゆる人間生活領域の市場化（すなわち商品化）、である。

サッチャリズムは、すでに経済的および社会政治的政策と実践についてみてきたように、本稿が取り上げる時

期に信頼と明快さを獲得した。しかし、それが理想として予期する目標は、いわゆる「企业文化」によって象徴されていた。「企业文化」の核心をなすものは、道徳的に妨げられない活動と富の創造の賞賛に基づいて達成される、個人的および社会的復興という、独特的展望である。貪欲という罪の意識から自由なこうした信念はある人々にとつては、基本的メタノイア、つまり帰納法的合理性に基づいては生じえない改宗なくしては達成されないことがわかつた。実際、ラーバン (Jonathan Raban) がサッチャリズムについて書いているように、「サッチャーの支持者」であるといふことは、「マーガレット・サッチャー自身の言葉でいえば、自己啓示を体験し、宗教的変容を経験すること」⁽²⁵⁾なのである。

「改宗」を求めるような、サッチャリズムの疑似宗教的性格は、戦後の英國政治の中でも具現化された説得とう慣例方式を避けた、信念のレトリックの核心的部分である。サッチャリズムは、その支持者たちに、長年にわたるセンス・コミュニケ (sensus communis) とバツカルイズム (Butskellism)⁽²⁶⁾との関係を断たせ、より高度な

理性に基づいては生じえない改宗なくしては達成されないことがわかつた。実際、ラーバン (Jonathan Raban) がサッチャリズムについて書いているように、「サッチャーの支持者」であるといふことは、「マーガレット・サッチャー自身の言葉でいえば、自己啓示を体験し、宗教的変容を経験すること」⁽²⁵⁾なのである。

の市場導入などの多くの施策をとらなければならなかつた。「改革」は執拗に行われ、しばしば冷酷で党派的な熱意をもって行われた。しかし、その改革は、人口過剰の小国内ではほとんどなしえないものであることが判明した。企业文化についてのサッチャー派の理念の正しさを確信し続ける道徳意識の強い人々には、信じようとする辛抱強い意志が求められた。人々は、企业文化の創造という究極的な目標を達成するためには、一時的な不平等な結果が正当化されるといふことを、受け入れなければならなかつたのである。

b 企业文化

「企业文化」は、まず第一に、ゆるやかに関連する一連の諸価値として最もよく理解されるだろう。新たな政治秩序の主要な考査者の一人であるヤング卿 (Lord Young) は、一九八九年九月の基調演説の中で、企业文化を要約して、「責任、イニシアチブ、競争と冒険、および経営努力という徳」について語っている。このよう

なヤング卿の、道徳的に解釈した企业文化の概念は、悪

企業文化はまた、実行の精神、組織体の美学や活動の

宣伝者たちの侵略的な隠喩にもかかわらず、企业文化は脆いものである。「企業」とその「文化」は、それらが宗教の中におけると同様に、社会および経営の中においてもデリケートなものである。企业文化は、状況の制御によつていとも簡単に抑制されることがあるので、それを実践する者にとっては、危険、圧迫、社会的無視、認識的な不調和や執拗な行動力の表現を意味する。

目標の名の下に政治的負担を迫るのに十分な信念を求めるイデオロギーであった。それに付随して、強要された政策と、現実の社会的状況との間に衝突が起ころる。市場化によって生ずる困窮は、望ましいものではないが、企業文化の盛大な晩餐会のために（料理のために）「卵を割る」⁽²⁷⁾ことが必要なようになつたのである。

おそらく、サッチャー時代以前と以後の最も根本的な相違点は、完全雇用が望ましいという信念の拒絶、労働力予備軍としての失業者の明白な容認、そして社会層における新たな配列、すなわち「下層階級」の暗黙の容認であろう。消費者の諸権利からなる市民憲章の公布（と、それに関連した、ヨーロッパ社会憲章の拒否）は、実際上、依存状態にある人々から権利を奪い、彼らを疎外する。

ある面から見れば、サッチャリズムは、私利追求を是認し、それを道徳的な躊躇から解放したといえる。また、他の面から見れば、市場の影響と機能の領域を復興し、拡大するために、労働組合法の改正、鉄鋼、運賃、バス輸送、ガス、水道、電気の私有化、企業地域計画、公営住宅の売却および教育、保健、福祉、自治体サービスへ

様式をも含んでいる。これらは、反抗的な人のバトスと受動性、官僚的な機関、さらにいえば、古来からの主として「二元的なイギリスの宗教的諸伝統とその儀式」といった、慣習化し硬直化した組織的構造とは矛盾するのである。

企业文化の精神は、大いに自己に関わるものである。そして吹聴されて「富の再配分」についての「浸透（trickle-down）」理論にもかかわらず、企业文化およびサッチャリズムは、人を動かす道德的ビジョンを生むことができない」とがわかったのである。「企業精神に富んだ個人」は、その孤独を和らげ、苛酷で原子化された社会的現実にふたたび人間性を与えようとする現実の形態を求める。今や、有機的共同体の最後のなごりはほとんど失われており、戦後の福祉国家と結びついた代用的な中間組織の多くは、非情にも一掃されている。

実際にいて、サッチャーラ派の企业文化は、倫理的または内省的というよりも、偏狭に道徳主義的、情緒的となる傾向があつた。したがつて、犯罪、暴力、ポルノグラフィーおよび性的過剰といった、社会文化的また人類

では、企业文化の形態もまた、独特の宗教的な形態を示しているのである。後に明らかになるように、それは、イギリスの伝統的宗教とは不似合いなものである。

二、「葛藤する「諸文化」——サッチャー時代の宗教

社会学的には、戦後のイギリスの宗教は、ほとんど世俗化過程の経験的および理論的評価を通して説明されてきている。イギリス（特にイングランド）の宗教は、移民にともなう民族の系列に沿つてますます分化してきている。⁽³³⁾ それにもかかわらず、やしあたり、キリスト教が（イングランドとスコットランドの二つの教会を通して）象徴的に国民の統合を表現し、「民俗」宗教（J. H. Habgood）や「潜在的」宗教（E. Bailey）を組織化する重要な手段である」といふに変わりはない。

将来の進展のカギとなる要因は、多数派集団の相対的無関心と比較した場合に不釣り合いなほどの、移民に起源をもつ民族集団の熱狂的信仰にあると思われる。最近の調査では、主要なキリスト教諸教派が一般的に凋落す

学的な諸問題は、本来ほど関心をもたれなかつたと思われる。侵略的な経営施策が、広がつてはいるがまだ解決されていない一般教育の危機に、取り組んできている。⁽³⁰⁾ 公的領域における社会倫理的な争点は、しだいに、政府の集権的なやり方や、社会統制および文化的商品化の私有化された商業手段に包摂されてきている。「活動的市民」は、絶えず成長する私的な「警備産業」が行う外的抑制によって統括されるアノミー的な不毛の社会にあつて、長く苦しい旅に直面している。「共有文化」の内省的本質および規範は、市場に向かい合つて動搖している。しかし、「社会といつたものは存在しない。個々の男性、女性そして家族が存在するのだ」という、サッチャーの最も有名な発言の中で表明された姿勢の漸進的な現実化に向かい合つて、動搖しているのである。

企业文化は、倫理的なものには関わらない。しかし、後述するように、過度に修辞的で、解放しえない伝統的な教会に直面したし、今なお直面している。伝統的な教会は、企业文化の言葉で言えば、慢性的に権能を剥奪されているのである。しかし、「興味深い」とい、広い意味

る中で、カリスマ的な家庭教会運動（house church movement）が発展している（ローマカトリック教団の場合に、最もそれが著しい）。ことが明らかにされている。新宗教運動と教会外のキリスト教徒の革新団体の役割は、今までのところ、わりあいに非政治的なものであるが、それについては、じいでは論じない。

サッチャー時代に宗教論争が公的に目立つた例として、四つの場合をあげることができる。すなわち、①フーケランド戦争の慰靈祭の内容をめぐつての保守党内閣とカンタベリー大主教ロナルド・ランシー（Ronald Runcie）との対立（一九八二年）、②保守派の中傷者によって「マルクス主義者」の神学であると糾弾された、イギリス国教会の報告書『都市における信仰（Faith in the City）』の出版（一九八五年）と、その後の有名なダラムの主教デービッド・ジェンキンス博士（Dr. David Jenkins）の政治的役割、③エジンバラにおけるスコットランド教会総会での、サッチャーのいわゆる「堤の上の説教」と呼ばれる演説（一九八八年）、そして④サルマン・ルシデ

イ（Salman Rushdie）の刺激的小説『悪魔の説教（The San-

tanic Verses)』の出版（一九八九年）が、それである。

る。

イギリス国教会の当局者が、一九八一年のフォークランド戦争後に功労者殊勲を行うことに対する乗り気でなかつた⁽³⁵⁾とか、公的領域においてイギリス国教会と国家の間に表面化してきた深刻な不和を明らかにする契機となつた。皮肉にも、個人および家族の徳行を神聖な義務とするという教会の役割が弱められてきたのであるが、その原因は、多分イギリス国教会の主教補佐機関である社会的責任委員会（Board for Social Responsibility）の社会的教えに最も明白にみられる集産主義的傾向だけではなく、E・R・ノーマン（E. R. Norman）が大いに影響力を及ぼした一九七八年の講演で提唱したような世界宗教としてのキリスト教の急激な非歴史化にあつた。ノーマンが提唱したのは、キリスト教信仰が基本である「永遠の真理」へ回帰すべきこと、および、個人の精神的成长のための独自の教化に回帰すべきことであつた。この講演は、世俗的諸問題からまつたく離れて、教会やキリスト教徒に向けて行われ、社会におけるキリスト教と宗教の本質と目的をめぐる顕著な分極化に貢献したのである。

その後さらに、相対立する「集産主義者」の立場に立った主教デービッド・シェパード（David Sheppard）の、『貧者への偏見（Bias to the Poor）』（一九八三年）と『都市における信仰』報告書（一九八五年）が、サッチャー率いる保守党が眞の、個人主義的キリスト教とみたものと、潜在的社會主義的ないし、集産主義的な聖職者の政治への干渉との間の懸隔を広げたのであつた。政治学的にみると、神の前での個人の道徳的自律という保守党的信条と、神学的集産主義者の「社会的信条」との間には、はなはだしい公的対立があり、その対立が、主要な諸教派（イギリス国教会、カトリックおよびメソジスト）の反発を、サッチャリズムと企業文化が示した活動領域に向けさせたことが明らかなのである。

サッチャー首相自らにとってこれらの問題が重要であったことは、一九八八年五月二十一日のエジンバラでのスコットランド教会総会における演説に示されている。⁽³⁶⁾ 英国の古参の政治的指導者たちは、「精神」——実際は個人の精神——の宗教的運命を真剣にとらえてきたし、

「政治家としてと同様に、キリスト教徒として」語つてきたのである、と。この演説は、サッチャリズムの宗教的、道徳的ダイナミクスを理解する上で基本的なものである。

これらすべてのエピソードは、広範なキリスト教の内部で起こつたのであって、当初は、自由主義的な知識階級の関心と利害を制御できなかつた。知識階級は、サッチャリズムによってますます脅威にさらされ、社会的に無視されていた。メディアは、知識階級の人々を時代遅れの「サラリーマン」とか「おしゃべりな階級」だと伝したので、彼らは、自らを無能と感じていた。これらの攻撃に対する逆襲の試みがいくつかなされたが、特に「憲章」第八十八章に署名したロンドンの人々によつて試みられている。⁽³⁷⁾ こうした宗教的無関心は、突然、サルマン・ルシディの『悪魔の詩』の出版妨害と、ルシディに対するイランの勅令の発布によって変化した。イギリスにおけるイスラム教の少数者集団の実状と潜在力が初めて明らかとなり、移民者との利益を支持する中流階級の人々の自由主義的価値観を危険に陥らせることにな

つたのである。宗教が、政治的、社会的日程にのぼつたのである。ユダヤ教⁽³⁸⁾、イスラム教とヒンドゥー教⁽⁴⁰⁾といった少数民族集団が政治的に目立つてくるにつれて、彼らのサッチャリズムへの相対的追従も明らかになつてきただ。これらのエピソードのいずれも、総合的な経済的、社会的復興という展望によって活氣づけられる変容過程として理解される企业文化と、宗教が出会つたことによつて生じる根本的な争点を正確に示すものではない。サッチャリズムの開始と展開は、事実上、社会倫理のレベルで主要な教派に直面したのである。そして企业文化のもう一つ宗教的次元については、ほとんど検討されなかつたし、いまだに検討されずに残つてゐるのである。⁽⁴¹⁾

四、宗教と企业文化——融合の仕方

多くの断片に分離した、サッチャリズムのアノミー的傾向は、公的領域と私的領域の関係を定義し直すものであつた。教会やその他の宗教団体は、俗事に関して、より重要な公的役割を果たした。イギリス国教会に代表される宗教と企业文化の融合の仕方と、経営・商業領域に

おける融合の仕方を、それぞれ概括することが可能である。サッチャー時代の政策に対する、制度化されたキリスト教からの社会倫理的抗議と、企业文化の実現に必要なものに対する宗教的反応を示す現象とが区別されるのは、この点なのである。

a イギリス国教会によるサッチャリズムの攝取

サッチャー時代のイギリス国教会は、一連の行動様式において、社会変化を限定づけるというよりは、むしろそれに従っていた。それで、イギリス国教会は、「企业文化」が課された間中、新右翼によって、依存と集産主義への時代錯誤的愛着に執着しているものとみなされた。それに対して、イギリス国教会は、サッチャー派の人々がイギリス国教会に個人の選択の自律性および家族の価値の支持者としての役割を課したことに対抗したのであった。⁽⁴³⁾ サッチャー自身の見解は、まさに率直なものであった。すなわち、「国家がその産業、誠実、責任をして正義によって際立つためには、国民は目的と倫理をもたなければならぬ。しかし、国家は、そうしたもの

を与える」とはできない。目的と倫理は、信仰の教えによってのみ獲得できるのである。したがって、教会は、そうした仕事のための道具でなければならない」と。しかしながら、皮肉にも、教会はふたたび、ノーマンの仮説の前提条件を満たしてきていると思われる。その仮説にしたがえば、いかなる時代の一般通念も、教会に編入された後にエリートの知的仲間集団と同一の見解を抱く主教によって「神学」へと変質させられる。つけ加えれば、グラムシ (Antonio Gramsci) のいう「有機的知識人 (organic intellectual)」のまさにアンチテーゼとして、主教は知識を吸収し、それらをイギリス国教会の命令として「下級の聖職者」に伝えるのである。「下級の聖職者」は、次は、民衆レベルで平信徒に向かい合う。管理政策の攝取とその下方への浸透という循環は、結果として、主教のイデオロギー的支配やかれらの「仲間文化」と、特權をもたず社会経済的現実の中に住む教区の牧師の小売店的な見解の間に、不調和を生み出す。⁽⁴⁵⁾

しかし、新たに任命されたカンタベリー大主教のキャリー博士は、教会的な「ネオ・フォーディズム

(neo-Fordism)」となるような経営活動の遂行と評価計画を提唱してきた。⁽⁴⁶⁾ 正確にいえば、イギリス国教会がこうしたサッチャリズムの特徴を自分のものとしたのは、政治的信条としてのサッチャリズムがつまずいて、全体にわたる指導権を失った歴史的時点においてであった。的確に理解された企业文化は、サッチャー派のライン・マネジメントに関するビジョンとは異なつて、制度化された教会にはほとんど相いれないままなのである。

b 企业文化の宗教——不可欠の宗教性？

「企业文化」の固有の宗教性という点からみると、制度化された宗教形態とそれとの間の衝突は、いつそう複雑である。たとえば「原因にいる (at cause)」概念や「結果にいる (at effect)」概念⁽⁴⁷⁾ にみられるような、ニューエイジ的、企業融合的および折衷的企業宗教の主要なカティグリーは、英國の制度的宗教の内的要求や「依存的」で「本質的」な牧師の内定論理と衝突する。後者は、依存ないし「結果にいる」ことを、キリスト教の主要な型として据えるのである。⁽⁴⁸⁾ サッチャー政権が最盛期に達した

一九八九年末にランカスターで開催された「ジョイニン・ゲ・フォース・スピリチュアリティ・イン・ビジネス (Joining Forces Spirituality in Business)」国際会議には、マネジメント・デベロップメントに携わっている二百人のニューエイジの実践者が集つた。⁽⁴⁹⁾ その結果は、時代を画するような記念すべきものであった。この折衷的で変化に富む宗教性を統一するための議論の中で、キーワードが明確にされた。すなわち、「主張」、「具体化」、「循環過程」、「危機」、「エネルギー」、「脱出」、「インカネーション」、「カルマ」、「情愛」、「魔術」、「危険」、「精神性」、「構想」、「闘士」などの用語だが、これらの、一見脈絡のない用語は、共通に繰り返し発生する諸特徴を示している。諸個人の自己実現をめぐるこれらの概念は、英國の制度化された男性的な宗教文化とは異なつたやり方で機能した。

企业文化の宗教にみられる、有能で情緒的な自己の再神話化は、より大きなエネルギーと能率の追求をめぐつて行われる。自己認識と実践の拡大化についての実用主義的、内在論的な倫理は、超越的なものに直面すると、

伝統的な犠牲と依存の涵養と矛盾する。さらに探究すべき多くの興味深い問題が、この時点で生じている。

五、結論——「資本主義の新たな精神」に

向けて⁽⁵⁰⁾

企业文化のまさに核心部分に見出されるカリスマ的人

物の意識を追究すると、そのタイプは、ウェーバー流のカリスマ的人格を思い起こさせるものである。その人物は、制度化された官僚的権力構造を脅威にさらすような、独創的変人である。企业文化は、ある意味では、後期資本主義あるいは先進資本主義社会のすれかけた合理性を非日常化し、カリスマを再発見しようとする試みであるといえる。前近代の文化的遺風、現代化傾向、ポスト近代的要因が窮屈に共存する複雑なイギリス社会の状況を考えると、色褪せ弱体化しているイギリスの「ポストキリスト教的」な宗教文化の遺物（イギリス国教会）は、ニューエイジの精神とそれに伴う宗教性の形態と折り合うことはほとんどできないだろう。新たな宗教が、先进的な資本主義社会の宗教文化的要請に応えているのに比

べて、制度化されたキリスト教各派や十分制度化された非キリスト教的諸宗教は、現代後期とポスト世俗化の危機に鋭く直面している。宗教の晩年において、倒木の朽ちた幹に生殖する菌のように、新たな形態の宗教が生ずるであろう。あるいは、伝統主義者にとってはそう思われるであろう。

逆説的かつ反語のことであるが、企业文化が行う非

日常化は、「選択」と「自由」の名の下に、新たな秩序を押しつけようとするものであった。イギリスの企业文化は、皮肉にも、その現実化のためにサッチャード派の経済的、社会的規律という世俗的モンタノス主義（a secular Montanism）を内に含んだ、予想上のヴィジョンだったのである。

企业文化は、本来、特定の政治や政党に拘束されるものではないとするには、なお論議の余地がある。それは、政治的には価値自由なものであり、むしろ革新者のカリスマ的機能に關係するものである。しかし、企业文化の実現は、権能の社会的分配に密接に関連している。ものごとを起す技術は、多くの情況下で評価される希

有な人間の特質である。⁽⁵¹⁾伝統的宗教内部での「企业文化」の宗教的再機能化は、ありうべきことであり、宗教的専従者とかれらの組織に対する目立った挑戦である。

企业文化は、サッチャリズムと同様に、イギリス社会の中で普遍的地位につくことはできなかつた。そのため、今や企业文化は、社会層およびその下位文化の通常のパターンにふたたび一体化されつつある。企业文化は、今や、イギリス社会において適所を占めているといえる。イギリス社会では、人口の大部は、実際には、不公平に分配されたごくわずかな知的資本および「文化資本」から排除されたままである。「宗教」およびより生命力のある現代宗教は、ほとんどの場合、社会的下層と人種的下位集団の中にある。人口の実質的部分は、「脱文化化」、社会的原子化過程、増大する犯罪行為、伝統的家族構造の崩壊、そして個人と社会階級間のコミュニケーション能力の喪失を経験しつつある。

「社会主義の終焉」によつて、今や、少数者の正当な要求を組織的に的確に表現しうるイデオロギーは存在しなくなつた。耳ざわりな（人種的、性的および生態学的）

圧力団体は、社会的コミュニケーションの主要なチャンネルを獲得してきた。そして、これらは、疎外された下層階級の抑圧されたフラストレーーションと潜在的な（現実の）侵害からの市民社会の隔たりを促進している。宗教に対する挑戦は、今までのところあまり知られていない。

歴史的にみれば、サッチャード政権とその宗教は、ほとんど失敗した世俗的終末論といったようなパトスを発散させている。現実の「企业文化」は、周辺的な概念にとどまつた。「企業」は、緊張に満ちており、規範と正常性から逸脱している。その擁護者は、概して、宗教と社会における例外的なエリートたちである。企业文化は、伝統宗教だけがやつと与えることができる社会学的資源を求める。すなわち、現代社会において、サッチャリズム（そして今やメジャリズム）が容認していたものと現在容認しているものをはるかに越えた、教育的資源や文化的資源を求めるのである。

制度化した伝統的な英国の宗教は、回復の場、依存の聖域として理解されるべきである。こうした宗教は、矛

盾を含んでゐるが、それらの矛盾は、犠牲や、変化に対する抵抗という致命的な効果的武器によって弁護されるのである。したがつて、それが、全体としての現代のイギリス社会の要求や、個別的な「企业文化」の要求に応えることは難しく。それゆえ、企业文化は、根本主義か徹底的に自由主義的な世俗化かとのたた、相互に排他的な二者択一とは対照的に、創造的かつ急進的な革新の中間物を与えるのである。企业文化は、おそらく、「敬神が少数派の趣味とならないよう」、宗教的クラブの外で神を追求する⁽⁵⁴⁾ための基礎となりうるであらう。そこにおいて、社会学者と宗教研究者の仕事が、社会的勢力の領域に収斂するのである。そうした領域は、学際的研究に基づいてのみ、十分に解釈できるであらう。そして、そのとおり、新たな資本主義の精神とこのたもの宗教的局面が、より完全に解明されるのである。

註

- (1) 筆者が、一九八九から九年にかけて、ランカスター大学宗教研究学部で受けたレキット研究奨学金を提供してくれだされたクリスタンダム・トラストに感謝する。アロハックト「宗教と資本主義の再興」で同僚とたか
- (2) 僕守党総裁演説⁵⁵於クック。一九八八年十月十四日⁵⁶、一六七頁。
- (3) 英国の情況の下での「宗教と資本主義の相互の復活」が世界的規模で出でてゐるところ証拠ば、極端かひの翻訳⁵⁷。後掲⁵⁸に譲り⁵⁹。M. Featherstone(ed.), *Global Culture Nationalism, Globalisation and Modernity*, London, Sage Publications, 1990. S. Gill and D. Law (eds.), *The Global Political Economy Perspectives, Problems and Policies*, London, Harvester, 1988. R. Peet, *Global Capitalism Theories of Societal Development*, London, Poutledge, 1991. L. Sklair, *Sociology of the Global System: Social Changes in Global Perspective*, London, Harvester, 1991. W. H. Swatos Jr. (ed.), *Religious Politics in Global and Comparative Perspective*, New York, Greenwood Press, 1989. R. H. Robert's (ed.), *Religion and Contemporary Capitalism: A World Survey*, London, Routledge/HarperCollins, forthcoming (introduction). 皆翻訳。
- (4) David Martin, "The Churches: Pink Bishops and the

ねした論議は、実り多い体験であった。特に、ハイドリアン・カリハム(Adrian Cunningham)、ポール・モーラス(Paul Heelas)、ポール・モーリス(Paul Morris)の各氏に謝意を表すのである。まだ、本稿作成の初期の段階でロマン・ヘセ⁶⁰へべだくしたウォーカイフ大学のジェームス・ベックフォード(James Beckford)氏に感謝したい。

- (5) Mrs. Margaret Thatcher, *Sunday Times*, 7 May 1988.
- (6) 一九八四年六月十八日のシティ・リバーハウス・ビル・ジネス・スクール(City University Business School)で行われた、当時の大蔵大臣ナイジル・ローフン⁶¹の講演、「英國の実験」のタイトルからの借用した。
- (7) 一九八八年一月十九日に、カールトン・フライの政策研究センターを代表して行われたナイジル・ローフン氏の演説、「新生英國」、トニーからサッチャーへの理念の潮流⁶²から借用した。
- (8) 経済政策の変更、サッチャーの社会改革の前提条件について、Samuel Brittan, "The Thatcher Government's Economic Policy," in D. Davanagh and A. Seldon (eds.), *The Thatcher Effect*, Oxford Clarendon Press, 1989, pp.1-37. Patrick Munford, "Mrs Thatcher's Economic Reform Programme-Past Present and Future," in R. Skidelsky (ed.), *Thatcherism, London, Chatto and Windus*, 1988, pp.93-106. ふるまつた十分な疑問⁶³にて、Peter Jenkins, *Mrs Thatcher's Revolution*:
- (9) Text of press release 27 February 1990, p.1.
- (10) Ibid.
- (11) Paul Morris, "Freeing the Spirit of Enterprise: the genesis and development of the concept of enterprise culture," Raman Selden, "The Rhetoric of Enterprise," both in Russell Keat and Nicholas Abercrombie (eds.), *Enterprise Culture*, London, Routledge, 1991. ふるまつた証據⁶⁴にて、筆者⁶⁵によると、Peter Brierley, "Christian England What the English Church Survey Reveals," London, MARC Europe, 1991. ふるまつた。
- (12) Jonathan Raban, *God, Man and Mrs Thatcher*, London, Chatto and Windus, 1989. 証據⁶⁶、サッチャリバースの宗教的問題⁶⁷が非常に重要なトピックである。
- (13) ポーランドでは現在強力ではあるが、立法府は代表を出でてこない政府をもつたが、単純多數選挙制度に基づいて確保された。
- (14) Kavanagh, 1987-88, p.281. 最終章「英國政治の再整備」は、有益な背景を提供してゐる。
- (15) 一九九〇年十一月二十六日付け「マント・イギリス」

(The Independent)』社説。

- (16) ジュニア・ヒーローが「保守」としての從来の親方針から最初の離脱として、一九九一年四月十一日に「ハーディング」の彼の講演を参照。
- (17) 英国経済の没落として M. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit*, Cambridge, CUP, 1981. 参照。

(18) いわした論議の役割は、サッチャヤー派の企業文化の設立によって根本的なものであった。従って、鉄道旅行者が「顧客」と呼ばれ、学生は教育を「消費する」等々である。人々は、彼らに文化的に再確認する「人間融通ある新たな陳腐な文句の使い方を学ばなければならなかつた。

- (19) ハーディング・ウォールトハウゼン・ハーティング、一九八九年十月一十九日。David Cox (ed.), *The Walden Interviews*, London, LWTBottree, 1990, p.41.

- (20) *Thatcherism and British Politics: The End of Consensus?*, Oxford, OUP, 1987(1), 1988(2), pp.9ff. 参照
- ◎ケイト・スチュアート・ホールとマーティン・ジャクソン、*The Politics of Thatcherism*, London, Lawrence and Wishart, 1983. Bob Jessop, Kevin Bonnett, Simon Bromley and Tom Ling, *Thatcherism: A Tale of Two Nations*, London, Polity Press, 1988. 参照。新興の自由派の間から David Marquand, *The Unprincipled Society: New Demands and Old Politics*, London, Cape, 1988. 参照。

(21) 有識な入門書として David G. Green, *The New Right: The Counter Revolution in Political, Economic and Social Thought*, London, Harvester, 1987. 参照。

- H. ルードーから受け継がれた、平等主義的合意の崩壊としての、独創性に富んだトキブームによる Keith Joseph and Jonathan Sumpson, *Equality*, London, John Murray, 1979. がある。第三章の論題「貧困は不平等や偏見」は、示唆に富んでいる。
- (22) ハーディングの離婚に関する有用な資料として Arthur Seldon, *Capitalism*, Oxford, Blackwell, 1990, pp.404-6. 参照。

- (23) サッチャヤー女史は、一九七八年五月六日の「モーグル」(the Bow group)における演説の中で、国家の役職者たちの彼女の見解を語りかじつて A. B. Cooke (ed.), *Margaret Thatcher: The Revival of Britain Speeches on Home and European Affairs*, 1975-1988, London, Aurum, 1989, p.76.

- (24) 複雑な論議として大敗が、最も縣名高い Digby Anderson (ed.), *The Kindness that Kills*, 1984. ハーディングの宗教徒の用語の中に表現された。クリスチャノ・チャリタブルの重要な考案者は、トマス・マッカーリー教授であり、Brian Griffith, *Morality and the Market Place*, London, Hodder and Stoughton, 1982. が大きな影響を受けた。

- (25) Raban, 1989, p.27.

(26) 保守国民党・A. バトル・エドワード・ケーツケルから提出された政策のおおいかな絶命、労働党と保守党が一九七〇年代の中で離れて進むをえなかつた領域。

- (27) ハンカスター大学における一九八九年十月の「企業文化の僵化」、ハーディングの講演(企業は立ち直った)を参照。(Keat and Abercrombie, 1991, p.6).

- (28) Samuel Smiles, *Self Help, with illustrations of character and conduct*, London, Murray, 1863. の著者であるサ缪エル・ペリスの良心に対する懲罰であるサ缪エル・ペリスの著者に対する懲罰が、Anne Eyre, "Faith, Charity and the Market," in Peter Gee and John Fulton (eds.), *Religion and Power Decline and Growth Sociological Analysis of Religion in Britain, Poland and the Americas*, London, BSA, 1991, pp.42-51. Frank Field, "How Have Britain's Poor Fared?", in Michael Alison and David L. Edwards (eds.), *Christianity and Conservatism: Are Christianity and Conservatism Compatible?*, London, Hodder and Stoughton, 1990, pp. 242-62.

(29) 英国の教育制度のペトロ・セクター(「公衆」)と私立(「完全な企業文化を設定するため」とされた政策措置の中でも非常に重要な要因となつた。

- (30) 雑誌「女性自身(Woman Own)」のアンダリューの中。

「権威主義的人道家」についての談話。サッチャヤー女史の最も有効な「ハーディング」の大半は、人気のある

トマス・ペリスの中でもされた(EMC)が、その間に人との表現の手段の「マーク・ヤング・シニア」が氣に入らぬ手段であつた。

- (31) たとえば、トマス・ハーディング・ウェーラン(Bryan Wilson)とトマス・マーティン(David Martin)の研究によると、世俗化をめぐる論議が、国際社会の間で英語の宗教社会学を支配した。関係文献は多数ある。James Beckford, *Religion in Advanced Industrial Society*, London, Unwin Hyman, 1989. が、この論争に対する最も最近の注目すべきトマス・マーティンの理論的貢献を示す。

- (32) 英国の宗教構成としての最も新しい記述は、P. Badham (ed.), *Religion State and Modern Society in Britain*, Lampeter, Edward Mellon Press, 1989. に記載される。Grace Davie, "Believing without Belonging is this the future of religion in Britain?", CISR paper, Helsinki, 1989. 参照。
- (33) *Faith in the City: A Call for Action by Church and Nation*, London, Church House Publishing, 1985.
- (34) H. ルードー、マーク・ヤング・シニアの形態が事实上一九四五五年第二次世界大戦の終わりに使用されたそれに非常に類似してゐることを指摘している。

- (35) ハーディング・マーク・ヤング・シニアの形態が事実上、非常に類似してゐることを指摘している。
- (36) ハーディングは、「救世主の教えは、明らかに社会的道德の個人的なそれを述べてゐる」と論じた。そして、現代のキリスト教は、「かつて道德的関心のための無氣

